

民生の痛みを見詰める詩人の良識

—耿林莽の近年作品における一側面

The Poet's Conscience Feels Human's Suffering

—Analysis of One Aspect of Genglinmang's Recent Works

林 美 茂

Lin Meimao

中国人民大学哲学院

School of Philosophy at Renmin University of China

E-mail: mimolin1230@yahoo.co.jp

[概要]: 近年来, 中国的现代汉诗领域出现了所谓“底层写作”的新倾向。一些评论家也称之为“草根写作”。那是因为其发端源于在珠江三角洲新兴工业地带打工的年轻人所创作的表现自己生活现状的诗歌作品。随之, 很快就有一些非打工经验者也参与了这种反映底层民生问题的创作。现在, 一些人就把那些反映底层民生的作品都归入此类, 称之为“新批判现实主义写作”, 或者比较通用的说法, 那就是“民生写作”。这种创作, 在中国当代文学界正在逐渐形成一种新的审视社会的角度, 一种关注社会变革过程中的民生问题的前沿思潮。

上述的“民生写作”热, 主要表现在现代汉诗的“分行新诗”领域。而作为现代汉诗的另一表现形式之“散文诗”, 这种题材的作品虽然不如“分行新诗”多, 但是涉及到这个问题的作品却比“分行新诗”来得更早, 那就是著名散文诗人耿林莽的作品。耿林莽在上世纪80年代末就开始创作反映底层民生问题的散文诗作品, 而到了最近几年, 他的散文诗中对于民生的疾苦更是倾注了最深切的同情, 表现出一个老诗人对于时代变革过程中社会疼痛的把脉和清醒的良知自觉。在他的作品中可以看出诗人对于社会发展过程中潜藏着危险性的冷峻提醒, 努力揭穿社会繁荣背后容易被人忽略的疼痛民生, 向我们展现了一个诗人在良知与使命中写作的悲悯情怀。也就是说, 他是以一个诗人的悲悯与良知抚触着这个变革时代的疼痛。本文通过分析近年来他的散文诗作品, 揭示其所表

現出来的上述“民生关怀”的审美倾向。

关键词：散文诗、耿林莽、民生写作、悲悯与良知、时代的疼痛

穀雨の4月においても北京はめったに雨が降らないので毎度の雨が尊く感じる。雨が降る度に、私は必ず耿林莽の散文詩『黄砂万里行』を思い出す。哀れなあまのまばらな雨滴たちは、いかにして幾千幾万に及ぶ砂粒の飛翔を抱きとめるのだろう。

私は高層マンションの自宅ベランダに半日近く静座し、手元には一か月前に送られて来たばかりの耿林莽の新著『黒コートに身を包む三人の男』がある。しばらくの間私は本から手を離すことができず、心が如何とも静まらない。本作は帰国後の私に送られた三冊目の耿林莽の作品集である。窓外を遠く眺めると、私の寂寥とした書齋と遠く向き合う延々と北に連なる西山と、蒼鬱たる緑の中に隠れる静淑な頤和園の昆明湖はとうに黄砂と霧雨の霞の中に霞み、またも一年の時が消えてしまった。なぜかは分からないが、私の気分はどうしてもわけのわからない沈鬱の中から抜け出すことができない。この時の気分は半日かけて読んだ耿林莽の散文詩と関係しているのだろう。もちろん耿林莽の作品が伝えるところの「憂鬱美」¹⁾ という特徴ではなく、明晰な時代の良識と「世を嘆き人を哀れむ」心情に感化された結果である。

中国当代散文詩界における最大の貢献者は誰であるかを議論するとしたら、まず耿林莽の名前を挙げるに違いない。耿林莽は中国の代表的な散文詩人である。1926年江蘇省に生れ、1940年代から現代詩の創作を始め、長年に亘り文芸雑誌の編集者の仕事の傍ら執筆活動を続けた。主に散文、随筆を多く世に送り、1970年代の末から散文詩の創作に転じ、一躍注目を集め、いまこのジャンルで最も代表的な存在となっている。代表的な散文詩集は『五月丁子』、『飛鳥の高度』、『草鞋叙情』、『世間に青い鳥あり』、『黒コートに身を包む三人の男』などがある。

私が耿林莽と文通をし始めたのは、1980年代のことである。当時の私もやはり文学愛好青年で、作品を通して耿林莽を知り、彼の職場を調べ、大胆にも手紙を出した。彼は意外にもすぐに返事の手紙をくれ、非常に感激したのを覚えている。思うに、耿林莽に感銘を受けた現代散文詩作家は私だけではないはずだ。多くの青年たちは耿林莽がいたからこそ自己の散文詩に対する想いをとことん貫くことができた。筆者は多くの散文詩作家に同様の体験があるものと信じているが、ここではこの点についてさらに掘り下げて述べることはしない。小論では耿林莽の散文詩の数ある主題の中から、民生問題についての反省の

1) 王志清氏が耿林?の散文詩が「人の心を戦慄するほど憂鬱美がある」と評価している（『心智場景』第73頁、中国華僑出版社、1996年）。

側面を取り上げ、この文体を通して近年の中国文学界における思潮の一傾向を提示したい。

耿林莽の散文詩が言及する内容は極めて広範で、歴史に対する沈黙思考、文化的な反省、時代の省察、人生の悟りなどはすべて彼の思考と審美の対象である。このため、一つの論文で彼の作品のすべての思想を語るのは不可能である。この文章でどれだけ多くを語れるかといった過大な期待をするつもりはなく、筆者はただ近年における耿林莽作品のなかで呈しているきわめて顕著な一側面をまとめることで、中国現代散文詩の創作に向けて一つの視点を示してみるつもりである。私がいうところの一側面とは、耿林莽の散文詩に現れている、世を嘆き人を哀れむという低層庶民の生活への同情と、冷徹かつ深沈な現実社会への憂慮だという民生への配慮の側面である。

一、近年中国現代詩における「民生創作」傾向との関連

中国当代文学の「民生創作」問題は近年日増しに人々の関心を集めている。「民生創作」とは、下層庶民、特に農村出身の出稼ぎ労働者の生活現況を題材に創作した作品を指す。中国語では、「民生写作」、あるいは「底层写作」という言葉で表現されている。改革開放以来、中国の社会が変容しつつあった1980年代、市場経済への移行が発展の歩調を速めるにつれて、実社会の成功と国際軌道に乗るという追求が中国を一步一步現代社会の構造へ移行させることを可能にした。社会のこのような急激な変化がもたらした多様な価値観が現実の中で幾重にも重なり交わり合い、文学創作の新しい審美傾向にきっかけを提供した。たとえば、1980年代後期には、かつての文革歴史に対する反省、独裁政治への批判、抑制からの思想の解放、個性自由の尊重への呼びかけが、次第に個人と時代の否定的な省察、伝統文化の徹底的な反省の追求に取って代わられた。中国現代詩の創作は次第に現実内包の欠けた「どのように書くかは何を書くかより重要だ（内容より形式だ）」、という審美の無意味さと美的感覚の磨耗を曝け出し、これによって近年来審美嗜好が低俗凡庸傾向に傾きつつあり、いわゆる「梨花詩」の登場や「ズボンを脱いで、裸で詩を朗読する」事件の発生など、文学の人文意義の崇高性を否定した審美事件が引き起こされるに至った。しかしながら、まさにこのような詩文学の崇高美が失われつつある社会背景下で、ひとつの新たな動きが人々の関心を集めた。「民生創作」と言われる詩作者やグループがインターネットなどのメディアを通して続々と登場し、人々の注目を集めたのである。

一般に、このような創作は深圳や広州の「アルバイト詩」（打工詩歌）に始まるとされている。言うまでもなくこれらの創作傾向は急激な社会の変化がもたらした格差現実の産物に他ならず、かつてない現代詩創作の新しい力である。かつての現代詩界では各大学で活躍していた「優等生」或は「エリート」が活動していたが、「民生創作」の作者は一般に社会の低層で生活する無名の人間、さらには大量生産のライン作業に生きる無名の青年

であることから、またの名を「低層創作」ともいう。著名な詩評家である王光明教授の総括によると、理論界では「低層創作」に対し別の呼び方があり、「生きる中での創作」、「草の根創作」、あるいは「新批判現実主義創作」などがある。それらに注目するに当たって、いくつかの論文を挙げてみることにする。『低層は叙述された運命から脱出することができるか』（劉旭、2004年）、『草の根詩と現代詩の転換』（李少君、2005年）、『中国の「文学第三世界」』（孟繁華、2005年）、『詩、新たな社会責任の担い手を探し出す』（梁平、2006年）、『近年詩作の民生への配慮』（王光明、2006年）など。王光明教授は「低層創作」の出現と存在に対して3つの特徴を導き出した。1、彼らは遮られた世界を描きだしている（我々の時代は発展と富が主流であり、人々は日常生活の審美と小ブルジョア情調を追求している。このため、社会の発展を担っている犠牲者たちの存在を容易に忘れてしまう。その主流によって遮られている世界はこれらの詩作を通して日の目を見る）。2、彼らは詩作世界の縁の集落に属する（彼らは職業も不安定で、身分もはっきりせず、文学の主流刊行物から重視されない、我々のこの華やかな世界によって隅に追いやられてしまったグループである）。3、彼らの存在は社会学的な意義にとどまらない（彼らの「直接的な」、つまり低層現場の創作が具備する現代性、時代性、批判性などの特徴は、傍観者と観察者の制約を断ったことによって社会学と文芸学の二重の意義を持つことになった²⁾。

近年、中国文学界における上記のような「民生への配慮」（以下「民生配慮」と略す）の創作傾向は、詩の創作領域にとどまらず、小説、散文の作品にも見られる。散文詩は現代詩の一表現形式で、20世紀の初頭の中国で起きた「白話文運動」（「白話」とは、古文に対していう言葉で、口語の意味に当たる）と同時に生まれた詩体であるにもかかわらず、現在に至るまで文学界によって片隅に追いやられている状況で、その境遇から完全に抜け出せていないので、文学評論家たちはそこまで散文詩界の動態に注意を払っておらず、他の詩体に現れている同様な民生問題への眼差しという、新しい創作傾向に対して未だに論及する者がいなかった。もちろん、主な原因はやはり散文詩におけるこのような傾向の作品が多くなかったことにある。散文詩の創作の中で民生というテーマを扱うものがあるにはあるが、例えば趙宏興『留守老人』と『帰郷』、陳勁松『裸足で都会を渡る子供』、司舜『満足な農民工』などのような作品は民生への眼差しがあるものの、彼らはこれらのテーマを扱うのに、傍観者あるいは部外者としての姿で現れるに過ぎなかった。もしかしたら筆者の浅学寡聞かもしれないが、私が読んだ作品の中で、少数民族の散文詩人莫独『都会を流離う娘』（十章）だけが比較的強い「民生配慮」の特徴を呈していた。しかしながら、耿林莽は違う、彼はかなり前から民生問題をテーマに作品を著した。「民生配慮」の特徴をもった作品が散文詩の領域でいまだ少なく、文学界の批評から関心を集められずにいる

2) 王光明『近年诗歌的民间关怀』（『2006.中国诗歌年选』、第1頁、花城出版社、2006年12月）参照。

ことから考えれば、耿林莽の作品が中国当代散文詩にとって重要な意味を持っていると言えよう。

実際、低層民生問題に関して、散文詩人耿林莽は1980年末にはすでに作品の中で取り上げていた。しかしながら、数が少なかったため、あまり注目されず、その後、90年代の半ばから、この問題を取り扱う現代詩の作品が多くなり、徐々に一つの潮流を成すようになった。此れに呼応するように、近年、耿林莽の作品の中に民生配慮の内容のものも数多く現れた。『草鞋叙情』（2002年）から、『世間に青い鳥あり』（2004年）、『黒コートに身を包む三人の男』（2008年）まで、この傾向は増す一方である。

先に述べたように耿林莽の作品は多様で豊富な審美角度を呈しているが、民生問題は彼が現実を省察する際に表現したきわめて自覚的な追求である。彼は『散文詩はもっと気ままにならないのか』と題する散文詩論の中で、「現実の人生に関心を持たず、世を嘆き人を哀れむ気持ちがなく、腐敗した暗黒的事物に対して見て見ぬふりをし、家のドアを閉めて主観だけで物事を思い描く、自己の内宇宙にあるちっぽけな個人の悲しみや喜びを告白するだけで、境界を広げるのは非常に困難だ」と語っている。文中ではさらに当代の散文詩には「社会的使命感」、「善良な弱小者に対する深甚な同情及び憂い」などの問題が欠けていると指摘している³⁾。残念なことに耿林莽のこのような指摘や、呼びかけや、作品における追求は多くの散文詩作者たちの共鳴を得ることはできず、多くの作者は依然として「内宇宙」あるいは「小さな感銘」の惑溺のなかにとどまっていた。もし散文詩界の更に多くの作者が耿林莽のように、目の前の生存現実、時代の変遷に対して冷徹な眼差しを持ち、深い憂患を持っていたならば、これからの中国の散文詩はよりゆったりと当代文学の審美の最前線に向かい、時代の審美大背景への参加を実現し、正真正銘の文体独立を果すことになるだろう。この点だけからみても、耿林莽の散文詩作品の意義は非常に大きい。

では、耿林莽の作品における「民生配慮」はどのような面に現れているのだろうか。我々が注目すべき、かつ積極的に創作を試みるに値するのはどのような問題意識だろうか。そのなかでどのような精神を取り出すことが出来るのだろうか。

二、社会進歩に潜む危険性への冷静な警告

耿林莽の散文詩における「民生配慮」の傾向は、当初は現実の変化に対する冷静な省察から始まった。彼はこの時代の発展、進歩、繁栄に対して楽観的ではなく、むしろまずは称賛者としての姿からの脱却を遂げた。たとえば、現代の商業文明を代表するツールである「エレベーター」を、彼は簡単に素早く上階に上がったり快適に買い物ができるという

3) 耿林莽『草鞋抒情』、第220-221頁、四川人民出版社、2002年。

環境面の問題としては捉えず、「人は機械にその地位を譲ってしまった」という失業危機を持った。さらには、この機械立方体の中において「人と人は顔を見合わせる/しかしなにも昔からの知り合いである必要はない」と、冷い人間関係の空間として捉えた（『エレベーター体験』）。さらにこの情報化時代における工業文明を象徴する「携帯電話」に関しては、彼が目にしたのは便利さやコミュニケーションの容易さではなく、メールの中に登場する言葉の「疲弊」や、言葉の意味が「誕生しては消えていく」速度であり、このような「都市にあふれている」虫の声に人々が段々慣れていく無感情の怖さのことであった（『情報化時代』）。表面的には時代の進歩を拒絶しているように見えるが、ここで伝えようとしているのは、もっと深いところで「時間」が人の生存に対して持っている原始的な意味の重要性と、「感情」が工業文明の中で失われつつあることへの指摘と省察である。このような指摘は『ソビートアップ』、『蟻の嘆き』、『稲妻のように過ぎる』などの作品の中により顕著にあらわれている。「アリが高速道路を横切る、彼らも命知らずな奔走を身に付けた」（『ソビートアップ』）、もしそうでなければ、「時代の車輪」がアリを粉々にひき碎いてしまうだろう（『蟻の嘆き』）。もちろんこのような速度への追求は一つの時代の発展を代表しているのだろう。しかし問題はこのような発展がもたらした結果は果たしてどのようなものなのか、私たちは見過ごすべきではない。例えば、人と人との交流がメールのやりとりという方式にシフトすると、月日が経つにつれて人の感情の温度もしだいにデジタル形式になり質感を失ってしまう。また都市と都市の間、団地と団地の間を最速な交通手段でつなぐことで快適さを思わせる面もあるものの、このような時間の短縮において、効率の追求が支払わなければならない代償はまさに「車内外の人の見つめ合い」をほんの一瞬で完成してしまうことに現れる。そこで、人々は「愛情に触れるに時足らず、天地の如く永遠なる愛、ただ稲妻の如く過ぐる一瞬」（『稲妻のように過ぎる』）でしかない状況に陥る。近年男女の情事を気軽な行為と捉える人々が増えつつある社会問題の露呈は、もしかすると人々がこのような「一瞬」の感情表現に次第に慣れてしまったのに関連しているかもしれない。このままいくと、生命と生命の融合、心と心の抱擁もだんだんと「速度」の中で人々に忘れられてしまうだろう。恋人の関係はもちろんのことで、走っている車の中から、突然、外に長らく会っていない旧友、知り合いを見かけたらなおさらだ。往々にしてあいさつすら間に合わず「車は電光石火のごとく走り去った」⁴⁾、チャンスは一瞬にして過ぎ去る。多くの場合この先の長い日々の中、会う機会はまだ二度とないだろう。同じ都市に住んでいるにもかかわらず、これらはみな「速度」や「効率」の追求に潜む問題である。

近現代における工業文明に対する批判は、人類の生存意義を見つめなおす伝統的なテー

4) 耿林莽『一个老人坐在铁轨上』（『人间有青鸟』，第26頁，广西民族出版社，2004年）。

マとなっている。マルクス哲学における産業労働から発生する人間疎外の問題に対する批判や、実存主義哲学が近代社会での人々の孤独とてたらめぶりを暴いているのも周知の事実である。『第三の浪』が出版されて以来、人々がポストモダン工業文明によってもたらされた生活の便利さ、情報の発達に対して快適な予感で満ち溢れているのと同時に、ポストモダン工業文明がもたらされた結果に対して冷静な反省を行うことが、すでに西洋諸国ではいわゆるポストモダンの思潮となっている。このようないわゆるポストモダンの生存背景下において生まれた音楽、絵画、文学など各種芸術への追求が現在日増しに人々の審美眼を変えつつある。我々が散文詩を一種の独立した文学ジャンルであるとかたく信じている以上、散文詩という芸術手法を用いて時代の思考と審美を見つめなおすのは当然のことである。しかしながら、中国現代詩における散文詩の中にこのような反省を具備した作品はあまり多く見られない。産業文明の道具、機械を連想させる作品となると更に少ない。まさにこのような欠落を補填するために、耿林莽は自らの作品に意識的にエレベーター、携帯電話、ビル、広告、車、列車、ホテル、バーなどの産業・商業文化のマイナスイメージを彼の思想キャリアとし、散文詩が持つ特有の表現法、即ち物事の本質的な細部の展開に長ける技法を通して芸術美を見出し、これをもって作者の時代の進歩に対する省察と反省を屈折的に表現するのである。耿林莽の一連の作品は批判的な角度から着手しているため、彼は謙虚に「私はなんて前途のない時代の落ちこぼれなんだ」と自嘲する⁵⁾。しかしながら、このような「前途のない」或は所謂「落ちこぼれ」であるからこそ痛いほど時代の急所を知り、足を止めて深く考えずにはいられないのだろう。

では、明らかに「落ちこぼれ」とわかっていながら頑なに発言するのは、一体何のためであろうか。筆者の理解では、作者は一方で時代の進歩に陶醉している人々に注意を喚起する必要があるため、つまり発展のスピードに「必ず付いていけない人が出てくる」、このような人々の命運を無視してはいけないことを指摘する。もう一方でもっと大切なのは、時代のスピードについていけたとしてもその結果の代償は一体何かということ冷静に考えなければいけないという注意を促すのである。明らかに作者のここでの本当の目的は人々に警告することであり、つまり発展を追い求めた過程に潜む盲目性と危険性について改めて考える必要があるということだ。

三、 繁栄の背後に隠される低層民生

勿論、我々の時代に対する反省は、単に上述した大きな外的環境の変化に伴う人の生存状態への省察のみに留まらない。もしそのみに留めてしまうのであれば、傍観者として

5) 同上。

の役割に過ぎず、そこで伝えんとすることが表層に触れるだけであって、痛いほどの力を生み出すことができない。したがって、さらに一步踏み込んでこれらの大きな環境の変化の中に生きる個体の運命を明らかにすることが最も注目に値する問題である。この点に対して、耿林莽はきわめて明確な自覚を示し、かつ良識に富んでいる。彼が作品の中で扱う対象は時代の寵児、あるいは社会の移行に恩恵を受けた者ではなく、この時代の発展を支えている重要な力でありながら容易に人々に忘れられてしまう低層の集団にその視線は定められている。例えば、出稼ぎ労働者、これこそが耿林莽が注目し続けている対象である。これら社会の底辺に生き、都市化、商業化社会のすきまで廉価な労働力としてもがき、今の社会の繁栄、発展のために最も汗を流しているにもかかわらず、彼らは貢献者ではあっても享受者ではない。このような献身と待遇の逆転、不公平な社会の構造について耿林莽は最も多くの思考をめぐらせている。

『農民工を仰ぐ』という作品の中で、耿林莽は次のように指摘する。「農民工は都市にそびえ立つ高層ビル一本一本の建設現場に生き、「高いところにいる」ものの、彼らの生活待遇と社会の地位は「仰ぎ見る」ものとは程遠く、見栄えのしない底辺の一角に割り振られ、「俯瞰」の対象となっている」。彼らは毎日例外なく高い足場から下りてくると、疲労のあまり「泳げなくなった魚のように、道路脇の掘建て小屋に潜るように入り、汗まみれの七尺巨躯を横たえる」と、これは1980年代末に書かれた作品の一節であり、耿林莽が長いことこの問題に注目していることを物語っている。以後の作品の中でこのような民生問題の思考はたびたび読者の前に姿を現すようになる。『楼に登る練習』、『竹の葉夢を吹く』、『乌衣巷』、『陥落』、『手の身上書』など、これらはすべてこのジャンルの作品である。『楼に登る練習』では、新しい高層ビルが落成し、工事現場を離れる際一人の出稼ぎ労働者がエレベーターに乗り込み高層ビルを上る情景が描かれている。その労働者は屋上で「あぐらをかき、菩薩のような格好で五分間の荘厳に浸る」という如何にも皮肉な情景で読者の心を突き刺す。その通りだ、我々が太平を謳歌する時代にあって広告塔、高級ホテル、デパート、高級マンション…彼らの汗が流れてないところがどこにあるだろうか？しかしながら、ひとたび建物を落成したら彼らはただ繁栄の部外者となり、この場所が名残惜しくてときたま足を止めてあたりを見回しても、蔑んだ目で見られたり、警備員に追い払われるのが関の山で、彼らの思いは怪しいものに誤解されてしまう。『乌衣巷』に描かれているのは、子供たちはみな働きに出てしまい、老人たちが「小さな家の前にたたずみ」彼らの帰りを待っている。その姿はまるで風に「磨かれ瘦せた長年の山」のようであり、ここは「カラスだけが毎晩定刻に帰って来て老人たちの相手をする」。『陥落』も同様に待っている老人を描いているものの、より心が痛む内容となっている。炭鉱が落盤し、子供たちは真っ暗な地下に深く埋もれてしまった。「塀によれかかる老人、まだそこに静座す/眼光枯れ消えて久しく、涙すでに流れ断つ/それでもまだ待っている。何を待つのか

か?」。最後の「それでもまだ待っている」というフレーズは、鋭利な刃物のように、読者の心に突き刺さる。『烏衣巷』での「待つ」にまだ何かしらの希望が含まれているとするならば、『陥落』での「待つ」は一種の絶望だとしか言いようが無い。これは明らかに民生告発を待ち、社会良知を待っているのだ。しかしながら『手の身上書』では日常生活における一人の手相を見る者という部分を取り出して、「誰も調べていない」事実、都市化の過程ですべての高層ビルのレンガや瓦のひとつひとつに出稼ぎ労働者の汗と指紋がしみ込んでいるという事実を人々の脳裏に焼きつけようとしているのである。

歌林莽の散文詩には上述したような作品以外に、いまだ民生配慮に関する作品が数多くある。例えば、『蛇使いと彼の蛇』、『百九十号小屋』、『通って行く、街角を通って行く』などはこのジャンルに属す。ここでは一つ一つの作品に細かく言及することはせず、簡単に作品名を取り上げて読む上でのヒントを提供することに留める。

周知のように、いかなる社会の変革においても弱い立場にある集団が犠牲と痛みを被る。これらの痛みを被る集団は往々にして自分たちの存在を示す発言権を持っておらず、そのために容易に公共社会から遮断されてしまう。彼らの運命は、社会における支配権を持つ集団、或はある程度発言権を持つ人たちがこのような痛みを前にして如何なる態度を取るのかに依存する。もちろん、見て見ぬふりをする者もいれば、なんとも思わない者もいたり、感覚が麻痺してしまっている人もいる。しかしながら、散文詩人の歌林莽は世を嘆き人を哀れむ情熱の心を持って、社会の底辺でもかく民生に深く同情を注ぎ、彼らの声を社会の表面に送り届ける。言い換えれば、自分が持っている社会への発言権を生かして繁栄という表象に覆い隠された多重社会の真実を明らかにしようとする。作品を通して、一人の知識人の良知と真心、使命と信念が人の心を揺さぶる力となってこだましているのだ。

四、良識と使命の中での創作

では、歌林莽のこれらの民生というテーマと最初に述べた民生創作にはどんな違いがあるのだろうか。言うまでもなく、著名な散文詩人として歌林莽は低層の現場で「生きる中での創作」という角度から民生の真実を指摘、表現しているわけではない。したがって、彼の作品は底辺の民生の参加者、体験者ではなく、あくまでも傍観者、観察者の視点で民生を体験しているにすぎない。例えば、路頭、路肩で雇い主を待つ出稼ぎ労働者を前にして、彼は「彼らのところに歩み寄ってとことん語り合う勇気がなかった」、なぜなら、彼は彼らを救うことができないと知ってしまった時の彼らの「落胆」に耐えられないからである(『農民工を仰ぐ』)。このため、彼が心の底で彼らを「仰ぎ」、「敬意を払う」以外、方法はない。ここで注意すべきは作者が「同情者」という態度で現れていないことである。歌林莽の作品をくまなく探しても一か所しか「同情」という言葉が見当たらなかった。そ

れは雑文の特徴について議論しているときに言及したものだ⁶⁾。「同情」には幾分上から下への態度が含まれる。しかし、彼は作者たるものが世を嘆き人を哀れむ、即ち「悲天憐人」の心持ちを持たなければならないと呼びかけている。中国語では、「憫」と「憐」の本義は同じではない。「憐」は「同情」に近い意味を持つものに対して、「憫」は「哀」や「愛」に近く、「哀」や「愛」の感情には、高い所から下を見降ろす、つまり上から下へ臨む要素はそこまで含まれていない。いかにも、耿林莽の民生配慮は常にどんな人間でも平等であるという低い姿勢をもって実践されている。

このような耿林莽の姿勢が最もよく表れている作品としてまずお薦めするのは『農民工を仰ぐ』である。彼は詩文の中で「私は常に敬意にあふれたまなざしをもってこれらの建設者の影を見つめている」と述べている。それは「道端で激しく照りつける太陽に炙られようと、冷たい風に吹きつけられようと、雨や雪が降ろうとも、彼らの目は変わらず期待の火花と献身の情熱できらめいている」からである。さらには、彼がホテルの案内嬢の笑顔を目にして、それを当然のことだとは思わず、それが心からのものなのかと追究することもなく、むしろあのようなサービスが彼女にもたらす疲れのことを思いやる。「あの一瞬だけ、あなたは/とても疲れてしまう」だろうと。さらに踏み込んで、あの笑顔の裏に隠れた辛酸のことを思い、「病院で母が病におかされ呻いているのを思い出し/今日の、楽しくないデートを思い出すと、顔から笑顔が消え……目の前から人が歩き去った。/笑顔は押し出すのが、既に一步遅かった/一粒の雨滴が眼窩に滲んだ」(『微笑みの失踪』)。

ご存じのように、今日の商業社会の中で、サービス業界に従事する人間が笑顔を作るのは至極当たり前の項目である。それゆえ、多くの人間はホテルなどで従業員の態度が少し丁寧でないだけでかんかんに怒り、よってやっとのことで仕事を見つけた女の子たちを虐める。しかしながら、この作品の中で作者は当然のごとくサービスを受ける「神様」のような態度ではなく、サービスする、サービスされるという概念は存在せず、きわめて平等な心持ちで彼女の笑顔を受けとめている。まさにこのような態度があるからこそ、作者は底辺に生きる人間でないにもかかわらず親身になって底辺の生活に潜んでいる実態を深く思いやるのが可能だったのだろう。

いずれの国家や時代であっても、作家、詩人はその時代の最も敏感な触覚であり、時代の最も本質的で痛みを伴う部分に鋭く切り込む。しかしながら、すべての作家や詩人がこれを成し遂げられるわけではない。明晰な良知を備え、強い使命感を持つ者のみがこのような境地に到達することを許される。耿林莽はもちろん崇高な人格と真心に満ちた詩人のひとりである。彼は詩歌文学に身を捧げた詩人たちを敬慕し、詩人孫静軒の詩句を借りて自己の文学理想を表現した。それは「詩歌が死んだら、私は孤独な墓守になろう」(『詩の

6) 耿林莽『草鞋抒情』、第221頁、四川人民出版社、2002年。

墓守』という一句に尽きる。彼はよくフランスの散文詩の大家、サン＝ジョン・ペルス (Saint-John Perse) の次の一節をとくとくと語る。「詩人に対し多くの要求はない、自分らの時代がうけた傷に良心の顕現ができる」と。疑うべくもなく、耿林莽の民生配慮の作品は、まさに「自分たちの時代が経験した傷に有識者の良心」を具体的に表現しているものである。これが時代の良識の追求であり、社会の発言者としての使命を自覚的に担っている。

魯迅の謙遜な発言を誤解し、その誤解の影響を受けて、文学界の多くの人間は散文詩を「小さな感銘」（小感触＝魯迅語）に過ぎないと捉えている。しかし耿林莽は「小さな感銘」は簡単な「ワレモノ」ではなく、「小さな感銘」は「小さな飾り物」ではなく、「小さな感銘」は全然小さくなく、むしろその中には人の心を震撼させる「大きな思考」を詰めることができるかと固く信じている。もちろん、これを成し遂げるために散文詩作家たちは「偉大な人格修養、豊富な人生経験、深奥な思想と芸術の素養をして基礎と成さ」なければならない、と彼は自覚している（『散文詩はもっと気ままにならないのか』）。彼の散文詩への信念は、まさにこのような情熱と理想に導かれ、この道を数十年黙々と歩んできたのだ。

参考文献：

- 1 王志清著、『心智場景』第73頁、中国華僑出版社、1996年3月第1版。
- 2 王光明編、『2006・中国詩歌年選』、花城出版社、2006年12月第1版。
- 3 耿林莽著、『草鞋抒情』、四川人民出版社、2002年8月第1版。
- 4 耿林莽著、『人間有青鳥』、广西民族出版社、2004年2月第1版。
- 5 耿林莽著、『三个穿黑大衣的人』、中国广播电视出版社、2007年10月第1版。
- 6 圣-琼・佩斯著、叶汝琰译/胥弋编、『圣-琼・佩斯詩選』、吉林出版集团有限责任公司、2008年9月第1版。